

木部林二先生を偲ぶ

伊藤森右衛門

木部先生はじつに寡黙そのもののお人柄であった。われわれが学生の頃、先生は生徒課主事をされていて、しばしば呼び出しをうけて先生のところに行ったのであるが、大概の場合は「どうした？」の一言で済んだ。したがって呼び出された方が、ひとりで始末の経過を喋ってしまわなければならなくなる。事実ありのままを述べればそれで“放免”されるが、重要なポイントを外すといつまでも立たせられる。ポツリと洩される一言はきわめて明確な結論、判断が含まれていたといつてよい。

先生は論文や著書はひとつも出されなかった。先生には先生のお考えがあつたことと思われる。商法の講義では野津努著「商法提要」をテキストに用いられたが、一字一句を厳密に吟味されて、註をほとんど全巻にわたって付けられたことを記憶している。また新憲法制定の折、学内で記念講演をなされ聴講した教官や学生一同に多大の感銘を与えたと聞いている。ご自分を厳しく律せられておられ、なかなかご見識をご披露なさらなかったことを知り、敬服の念を深くしたのである。

先生は温情の人であつて、人知れず学生や卒業生のお世話をなさつたと聞いている。私も幾度か身辺のことを相談申し上げたことがあるが、そのときどき親身になつてのご忠言を頂いた。フランスに留学される教官が居れば、細かいことまで気を配り、下宿などもお世話されたと聞いている。自分を律せられる厳しさの反面、人には大山のように暖かく抱擁するお人柄なのである。

先生にはお身体を悪くされてからも、訪れる人から、大学の様子を聞いて涙を流して喜ばれていたそうである。ご冥福をお祈りして擱筆したい。